

55 フランス軍陣医学における

ヴァル・ドウ・グラーズ病院の役割

今泉 孝

パリの五区にあるヴァル・ドウ・グラーズ病院は、そもそも修道院として始まり、ブルボン王朝ゆかりの教会でもあった。それがフランス革命後に病院として使用されるようになり、さらにその後、医学教育機関としての役割も担うようになった。そこで、フランス革命までのヴァル・ドウ・グラーズの歴史および、フランス軍陣医学の流れをみた後、陸軍病院としてのヴァル・ドウ・グラーズの医療および医学教育について触れたいと思う。

一 ヴァル・ドウ・グラーズの歴史

アンヌ・ドウ・ブルターニュが再建した修道院を、アンヌ・ドートリシュが現在の土地に移すことにしたのが一六二一年のことであった。彼女が男児(のちのルイ一四世)誕生を感謝して建てた教会は、約二〇年をかけて完成

した。王家の皇子皇女たちの遺体をヴァル・ドウ・グラーズにおさめるといふ習慣はフランス革命まで続いた。

二 フランスの軍陣医学の歴史

一六世紀までは悲惨な状況が続いたが、アンブローワズ・パレ(一五二〇～一五九〇)のような名医も出現した。一五九七年アンリ四世は移動野戦病院をつくり、一七世紀初頭にフランス軍隊は近代的に整備されるようになった。当時は戦争のたびに病院の編成と解散が繰り返された。

一六三〇年に最初の駐屯病院が誕生し、一七〇八年の王令で衛生部ができる(衛生将校の恒常的軍団)。一七七五年陸軍病院に医学教育のための階段教室をつくることになる。グロ・カイユ陸軍病院(一七五九～一七九五、一八〇二～一八九二)は手狭になり、新たな病院の必要が生じた。

三 ヴァル・ドウ・グラーズ病院の歴史

一七九三年陸軍病院として使用することに決定し、一七九五年十一月に患者を受けられる(ここからヴァル・ドウ・グラーズ病院の歴史が始まる)。一〇〇〇ないし一二〇〇

○人収容。

一七九六年教育病院となり、軍衛生部の教育センター的役割を担う。ラレーが解剖学、デジュネットが生理学などを教えた。学生数は四五人で、その内訳は内科医一人、外科医二〇人、薬剤師一五人であった。三年間就学。一七九八年ラレーたちはナポレオンに呼ばれ、エジプト遠征に向かう。他の教官や学生たちも出発したため、一八〇〇年に教育は中断し、他の教育病院でも一八〇三年に中断。

一八一六年に講義再会（ヴァル・ドゥ・グラース王立陸軍病院臨床学校）。三年間就学。この頃からヴァル・ドゥ・グラースの評判が高くなる。デジュネット、バルビエ、ロディベール、ブルセなどが教えた。

一八三六年再教育病院となる。他の教育病院で二年間勉強した後、ここで三年目を過ごす。学生数は七五人。

一八三八年よりヴァル・ドゥ・グラース病院の増築工事開始。

一八五〇年教育病院を廃止して、ヴァル・ドゥ・グラース陸軍病院付属の衛生局実習学校をつくることに決

定。翌年開校。就学期間一年。この学校に入学するためには医学士の資格が必要。当初の講座内容は、毒物学および化学、局所解剖学、臨床外科学、手術医学と装具・包帯、臨床内科学、衛生学および法医学の六講座であった。教授陣には、マイヨ、ヴィルマン、ラレー、ラヴロンなどを輩出。

フランス革命から一九世紀中頃まで、政治体制が変化する度に医療制度や教育制度も多大な影響を受けたが、そうしたなかで、ヴァル・ドゥ・グラースはパリの陸軍病院の中心となり、さらに軍医教育の中心としての地位を築いていった。

（弘前市）